

# 外国人留学生の進路選択行動に関する研究 —進路選択自己効力と日本語能力自己評価が及ぼす影響に着目して—

専攻 人間発達教育  
コース 教育コミュニケーションコース  
学籍番号 M19007D  
氏名 小牧 由美子

## 問題の所在と目的

日本語教育機関に所属する外国人留学生の多くは、日本国内の高等教育機関への進学を希望している。しかし、日本語能力が高くても進路選択に向けて行動が取れない者や、妥当な進路が選べずなかなか進学先が決まらない者がいる。

そこで、本研究では進路選択自己効力と日本語能力自己評価に着目し、留学生の進路選択行動にどのような影響を与えているかを明らかにする。

自己効力とは、課題遂行を成功裡におさめられるとする自信である。進路選択自己効力が高ければ、進路決定に必要な行動を活発に行い、努力もするとされる。しかし実際の能力が伴わなければ、課題を成功させるのは難しいため、能力の自己評価が妥当であることも重要であると考えられる。

本研究では、まず、進路選択自己効力の高さおよび日本語能力自己評価(以下、自己評価と略記)の妥当性に影響を与える要因について検討を行った。進路選択自己効力については、大学進学動機、異文化適応感との関連を、自己評価の妥当性については、学習ストラテジーとの関連を検討することとした。その後、進路選択自己効力の高低と、自己評価の妥当性によって、外国人留学生のタイプ分けを行い、タイプ別の進路選択行動の傾向や特徴を検討した。

## 調査

### 1. 調査協力者

兵庫県の日本語学校に在籍する外国人留学生125名を対象に調査を行った。年齢は17~36歳。国籍は中国108名、ベトナム17名。性別は男性87名、女性38名である。

### 2. 調査時期

第1回調査：2021年9月上旬

第2回調査：2021年9月24日

### 3. 調査内容

①クラス、②性別、③国籍、④年齢、⑤来日時期、⑥日本語学校卒業予定時期、⑦最終学歴、⑧希望進路、⑨自宅での毎日の学習時間、⑩所持日本語公的試験資格をフェイスシートにおいて尋ねた後、以下の項目について回答を求めた。

(1) **日本語能力の自己評価** 本研究では、自己評価の妥当性を、個人が思う成績と実際の成績との一致度からとらえることとし、2021年9月定期試験の成績について、以下の3つの観点から検討した。①目標点：2021年9月実施の定期試験前に、4科目各0~100点の間で試験の目標点を尋ねた。②予想点：2021年9月実施の定期試験の試験直後に、試験の予想点を尋ねた。回答の仕方は目標点と同様であった。③実際の得点：2021年9月実施の定期試験の実際の得点を筆者によりデータに加えた。これを目標点・予想点と照合し、自己評価の妥当性をとらえた。

(2) **進路選択行動** 外国人留学生に可能な進路選択行動を検討するため「家族や親戚に、進学先のアドバイスをもらう」、「進学説明会やオープンキャンパスに参加する」等、全12項目を独自に作成した。4件法。因子分析を行い、「志望校に関わる行動」、「情報収集と資格取得」の下位尺度を得た。

(3) **進路選択自己効力** 村越(2011)の「進路選択自己効力感尺度」より15項目を利用した。4件法。因子分析を行い「情報収集・計画遂行」、「将来設計・目標設定」の下位尺度を得た。

(4) **大学進学動機** 栗山ほか(2001)の「大学進学動機尺度」の24項目を一部留学生向けに修正を加え用いた。5件法。因子分析を行い、「知識・教養の伸長」、「漠然」、「社会的地位」の下位尺度を得た。

(5) 異文化適応感 植松 (2004) の「異文化適応感尺度」28 項目を一部外国人留学生向けに修正を加え用いた。4 件法。因子分析を行い、「滞在国の言語・知識」、「心身の健康」、「学生生活」、「ホスト親和」の下位尺度を得た。

(6) 学習ストラテジー Oxford (1990) の Strategy Inventory for Language Learning (SILL) をもとに尹 (2011) が作成した「学習ストラテジー」より、日本語学校の学習場面であまり使われないと思われる項目を省いた 34 項目を一部修正して用いた。4 件法。因子分析を行い、「語彙習得ストラテジー」、「読解ストラテジー」、「発話ストラテジー」、「間接ストラテジー」、「情緒焦点付けストラテジー」の下位尺度を得た。

(7) 進路選択に用いる情報源 進学先を決める際、参考にするものとして、「家族や親戚」、「志望校のホームページ」等の情報源を検討し、9 項目作成した。6 件法。1 因子構造であったため、情報源を多く取り入れる程度を示す得点として扱うこととした。

## 結果と考察

### 1. 進路選択自己効力と大学進学動機・異文化適応との関連

進路選択自己効力の「情報収集・計画遂行」については、大学進学動機の下位尺度「知識・教養の伸長」、「漠然」、「社会的地位」および、異文化適応感の下位尺度「滞在国の言語・知識」、「学生生活」と有意な正の相関が見られた。

また、「将来設計・目標設定」については、大学進学動機の下位尺度「知識・教養の伸長」および異文化適応感の下位尺度「滞在国の言語」、「学生生活」と有意な正の相関が見られた。

### 2. 自己評価の妥当性と学習ストラテジーとの関連

2021 年 9 月実施の定期試験の予想点と実際の点数から、自己評価を妥当 (両得点が概ね一致)、過小 (両得点が不一致で予想点が低い)、過大 (両得点が不一致で予想点が高い) の 3 群に分け、群による学習ストラテジーの得点差を検討したが、有意な差は得られなかった。

### 3. 進路選択行動・情報源への影響

自己効力得点により設定した「自己効力」の低・中・高群と、「自己評価」の 3 群を独立変数、「進路選択行動」の 2 つの下位尺度得点をそれぞれ従属変数とした二要因分散分析をそれぞれ行った。

その結果、「志望校に関わる行動」は交互作用が有意であり、「自己効力高群」においては、「自己評価過大群」より「自己評価妥当群」のほうが有意に高い傾向にあった。「情報収集と資格取得」は、交互作用は有意ではなく、進路選択自己効力による群の主効果が有意であった。

「情報源」を多く取り入れる程度についても同様の検討を行ったところ、交互作用は有意ではなく、自己効力感による主効果が有意であった。

以上より、進路選択自己効力が高い者のほうが、積極的に進学先を調べ、様々な情報源から情報を取り入れていることが示された。中でも、自己評価が妥当な者は進学先を絞り、具体的に行動を取っていることが明らかになった。

さらに定期試験の目標、予想、実際の 3 得点および、自己効力の 2 下位尺度得点を用いたクラスター分析から、自己評価と自己効力の組み合わせによる学生のタイプを 5 つ抽出した。そのタイプを用いた分析からも、進路選択行動や情報を取り入れる程度について、自己効力が低いタイプでは消極的な傾向にあることが明らかになった。

## 結論と今後の課題

本研究では、外国人留学生の進路選択行動には、進路選択自己効力が大きく関わっていることが明らかとなった。一方で、自己評価の妥当性を支える要因は明らかにならなかった。しかし、これが実際に最も重要になるのは、合否に至るかどうかという点にあると思われる。

今後、留学生の進路選択から進路決定までを追うことで、自己評価の妥当性が進路選択行動や実際の進路決定にどのような影響を与えるかをさらに検討したい。

主任指導教員 中間玲子  
指導教員 中間玲子